

使徒言行録 18 章 12 節～17 節。ガリオンがアカイア州の地方総督であったときのことである。ユダヤ人たちが一団となってパウロを襲い、法廷に引き立てて行って、「この男は、律法に違反するようなしかたで神をあがめるようにと、人々を唆しております」と言った。パウロが話し始めようとしたとき、ガリオンはユダヤ人に向かって言った。「ユダヤ人諸君、これが不正な行為とか悪質な犯罪とかであるならば、当然諸君の訴えを受理するが、問題が教えとか名称とか諸君の律法に関するものならば、自分たちで解決するがよい。わたしは、そんなことの審判者になるつもりはない。」そして、彼らを法廷から追い出した。すると、群衆は会堂長のソステネを捕まえて、法廷の前で殴りつけた。しかし、ガリオンはそれに全く心を留めなかった。

アカイア州のコリントは恵まれた港湾を持ち、経済的には繁栄していたが、道徳的には荒廃した町であった。パウロはコリントに留まり、主イエスの十字架の福音を語り続けた。アカイア州はガリオンが総督として治めていた。彼は紀元 51 年から 52 年まで総督を務めたことと碑文に書き残されている。この碑文がパウロの年代決定に大きな役割を果たした。

パウロが十字架で殺されたイエスをキリスト（救い主）と宣教することを、ユダヤ人たちは許せないとして、一団となってパウロを襲い、法廷に引き立てた。そして「この男は、律法に違反するようなしかたで神をあがめるようにと、人々を唆しております」と訴えた。パウロが弁明をしようとする、ガリオンはパウロを制して、ユダヤ人に向かって言った。「ユダヤ人諸君、これが不正な行為とか悪質な犯罪とかであるならば、当然諸君の訴えを受理するが、問題が教えとか名称とか諸君の律法に関するものならば、自分たちで解決するがよい。わたしは、そんなことの審判者になるつもりはない。」社会的な不正とか、悪質な犯罪であるならば、訴えを受理するが、訴えた問題はユダヤ教の教えや名称や律法に関する事柄であるから、ユダヤ人自身で解決すればよい。自分はユダヤ教の問題を裁判するつもりはない。総督としては、当然の言い分である。彼らを法廷から追い出した。

ところが、群衆は会堂長のソステネを捕まえて、法廷の前で殴りつけた。ユダヤ人たちはパウロの宣教に反対していたが、ギリシアの群衆はパウロに味方し、訴えたソステネに怒りをぶつけたのであろうか。この騒動に対し、総督ガリオンはユダヤ人問題に深入りしたくないという態度で、全く心を留めなかった。使徒言行録の著者は、ギリシア・ローマ人たちはキリスト教に好意的な態度であったという書き方をしている。

18 章 8 節で、会堂長クリスポは一家をあげて主イエスを信じ、クリスチャンになったと記している。殴られた会堂長ソステネは、クリスポの後任の会堂長であろうか。ところがパウロは、コリント書（一）1 章 1 節で、「兄弟ソステネから」と名前を記し、挨拶を送っている。彼もクリスチャンになり、パウロの宣教の協力者になったようだ。

パウロはコリントに 1 年 6 ヶ月、滞在して宣教に当たり、教会を立ち上げた。しかし、コリント教会にも町の荒廃がそのまま持ち込まれ、種々の問題が起き、パウロを悩ませた。パウロはしばしば手紙を書き送り、信仰的に立ち直るように諭している。主イエスを信じ、クリスチャンになることは容易いが、主イエスに従って生きることは、いつの時代も、簡単なことではない。自己自身を求めず、砕かれた信仰であるかを誠実に吟味することが求められる。